

「花育(はないく)」という言葉を目にするようになってもう何年か経ちます。今までもボランティア活動で子供たちに花を通じた教育をされている方々はたくさんいらしたはずですが、ここ最近イベントや教室があったり、新聞にも取り上げられていたり、目や耳にすることが多くなったように思います。子供たちに植物の神秘、美しさ、そして喜びを与えてくれることを伝えていくことはとても大切なことで、業界としては大きな波を起こし、世の中を変えて行きたいものです。最近の日本では子育て環境も徐々に変わってきました。昭和40年代に生まれた私が小学校の頃に何をして遊んでいたか。ゴムとび、ドッチボール、自転車遊び、缶蹴り、おにごっこなどはもちろん定番でやっていました。花育はなかったけれど、ツツジの花の蜜をなめたり、名前も分からない小さな花を食べたり、オシロイバナの花で笛を吹き、実を割り白い粉を出してお化粧してみたり、誰に教わるでも無くそうやって植物とも触れ合っていました。そんな子供の頃の体験が植物を身近に感じるきっかけとなり、今のフローリストの仕事に少なからず影響しているような気がするのです。

さて、今の子供たちの遊び。与えられるモノが多すぎて創造性に欠けていると思います。決して子供のせいではありませんが自然の中で五感を刺激するような遊びはできない環境です。現代人が抱える時間に追われた生活事情、安全で安心な遊び場環境のなさ、庭木一本植わっていない「駐車場スペース重視」の住宅事情など、子供だけでなく大人までもが植物とかかわる余裕や時間、場所に気持ちまでもが遠のいてしまっています。休日に庭いじりなんてあまり見られなくなってしまいました。そんな大人にこそ花育が必要なのでしょうね。だって子供は親の姿を見て育つのですから。

我が家には6歳の男の子と2歳の女の子がいます。お兄ちゃんはお外遊びもしますが、どちらかというと家でDVDを見ることが好きなタイプ。妹は裸足で外を走り回ったり、滑り台を何回も何回もすべりたがる活動的なタイプです。息子は私が教えたり、させたりしたわけでもないのに、見よう見まねで私の仕事の残り花で花束を組んでみたり、短くなった花をお皿にアレンジしてみたりして私に「僕の作品どう？」と聞いてきます。子供の作ったものにとって本当にきれいなんです。自然的で躍動感があつてとてもナチュラル。素直なままでの表現です。だから思いつき「きれいだねえ、素敵な作品だねえ、どこに飾ろうかなあ」とほめちぎります。親ばかりですね。でも私がしていることを見てないようでちゃんと見てくれていたんだなあとうれしくなりました。まだ2歳の娘は庭に植えてある木や花の葉っぱをちぎっては玄関にばら撒いてくれます。私は心の中で「もー！やめてよ！」と思いつつも、これも子供の経験の一つだな、まあ仕方がないか、と自分を納得させて、ひととおり撒き終わったところでせっせとほうきで掃除しています。

でも2人とも歩いていると「あ、花が咲いてる」と気づいてきますし、6歳の方は「これは何の花？」「これは？」と次々に聞いてきます。私が答えられないのがあると、「え～、かあかはお花の先生なんやろ～」と不満そうです。



先日家族で奈良公園に行ってきました。目的はふたつ。2人の子供に鹿を見せること。檻に入っていない鹿を見せたかったのです。そして芝生に覆われた綺麗な若草山に登ること。奈良駅から歩いていったのですが、自由に暮らしている鹿に息子は真剣に驚いていました。そして若草山。2歳の娘が30分くらいかかる山頂までの道のりをすべて自分の足で登りきったのです。途中何度も「抱っこ！」といわれましたが、「抱っこナシ！頑張れ！」と言ったらよたよたした足取りで本当に登りきってくれました。まだおしゃぶりが離せない2歳なのに。すごい！えらい！すれ違う人もみんな褒めてくれました。でも女の子。どんな子になるのかしら。私似？下りはさすがにおんぶをねだり、おぶった途端にぐっすり寝込んでしまいました。若草山からの帰り道、息子は鹿せんべいではなく自分が拾ったどんぐりを鹿にあげて食べてくれたと喜んでいました。そして天気にも恵まれ暑い位だったし、一日中歩き通しだったにもかかわらず、「今日は楽しかった！」と元気に言ってくれた時は大きくなったなあ息子成長を感じました。こんな風に自然と触れ合う体験をたくさん重ねて動植物に自然と接することが出来るようにしてあげる事が親としての自分にできる事なのではなからうかと感じているところです。まずは私が自然や子供に向き合っていくこと事なのでしょうね。

でも実は私、鹿にお弁当を食べられそうになってとっても怖かったのです。「花育」修行中です。